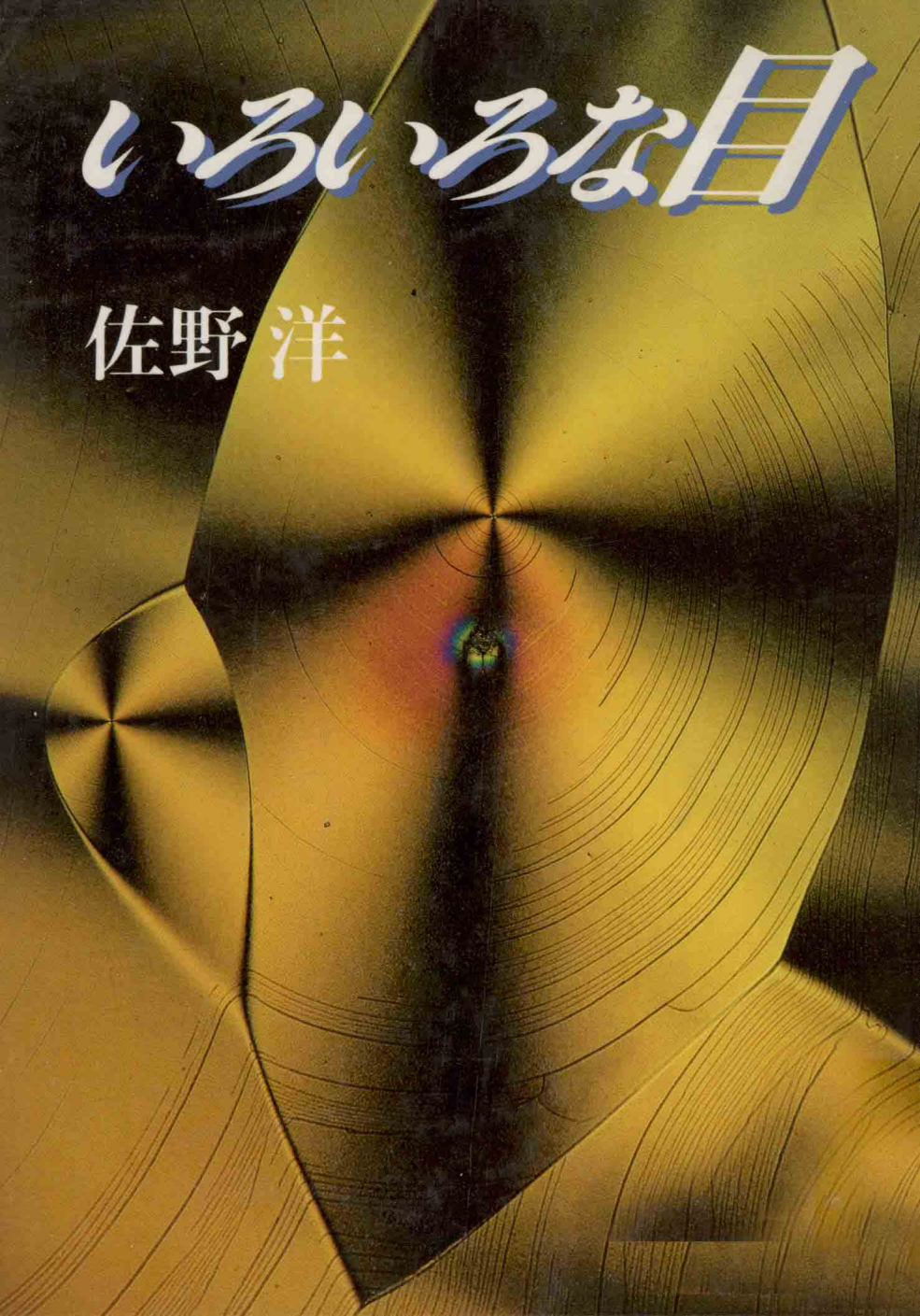


いろいろな目

佐野 洋



いろいろな目

佐野 洋

いろいろな目

一九八六年一月二十五日 初版発行

著者 佐野 洋

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)二〇五一(編集)
〇三(五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

電話 〇六(三二二)一五七三 梅田第一ビル内

印刷所 東京研文社

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

■目次

許す目	5
隠れた目	27
覗く目	49
乾いた目	67
他人の目	87
むかしの目	109
場違いな目	131
空からの目	151
うつろな目	173
芝の目	195

装帧／安彦勝博

いろいろな目

許 す 目

会計窓口の女子係員が、棒状のマイクに向かって、患者の名を呼び始めた。何人分かの伝票がまとまってから、読み上げるという方法を取っているようだ。ひとりずつ、ぼつんぼつと呼ぶより、その方が能率的なのかもしれない。

「後藤さん、後藤隆一さん。野口さん、野口陽平さん」というぐあいに、最初に姓だけを呼び、そのあとに姓名を続ける。どうせ姓名を呼ぶのなら、最初から呼べば、手間が省けるだろうに……。山岡は、ベンチで待ちながら、漠然と、そんなことを考えた。あるいは、一度だけ姓名を呼んだのでは、聞き落とす可能性があるというので、あのような呼び方になっているのかもしれない。いずれにせよ、大したことではない、と考えて山岡は苦笑した。

山岡は、この日、会社の命令で病院に来たのである。社内の定期集団検診の日に、九州に出張していたため、その分、一人だけで健康診断を受けたのだっ

た。もちろん、病院での用が終ったら、会社に顔を出すことにはなっているが、何時までに帰らなければいけないというわけではない。それにもかかわらず、早く名を呼ばれないかと、いらいらしている自分がおかしかったのだ。

それから五分ぐらい経って、山岡は名を呼ばれた。彼は、すぐに会計の窓口に行つて、プラスチック製のカードを出した。会社の厚生課から預つて来たカードである。彼の会社は、この病院と特別な契約を結んでいて、会社の命令で受診したときには、カードで支払いをするシステムになっていた。

会計の窓口を離れて、山岡は腕時計を見た。十二時二十分。どこかで昼食をとり、そのあと、パチンコでもしてから、会社まで歩いて帰るか……。そう考えながら、玄関の自動ドアの前に立った山岡は、

「あのう、すみません」

という女の声に振り返った。

二十歳ぐらいの、髪を肩のあたりまで垂らした女

が、山岡に向かって、軽く会釈をした。

ハンドバッグを肩から下げ、手には、ブックベルトを掛けたノートを持っている。女子大生らしいが、山岡には記憶がなかった。

「ほく？」

と、山岡は聞いた。

「ええ、山岡さんですね。さっきから、どうもそうじやないかなと思っていました。でも自信がないので、ご挨拶しようかどうかと迷っていたら、山岡雅樹さんと、名前を呼んだので……」

「ええと、君は？」

山岡は改めて、相手の顔を見た。口紅だけはつけているが、ほかには化粧をしていないらしい。二重まぶたのせいかな、目は大きく見える。その目が、恥ずかしそうに笑っていた。

「水谷です。水谷睦子……」

彼女は、名乗ったあと肩をすくめた。

「ああ、睦ちゃん？ 驚いたなあ……」

山岡は頭の中で計算をした。睦子とは年齢が八つ違いのはずであった。すると、二十七引く八で、現在彼女は十九歳ということになる。あのころは、小学六年で、十二歳だった。七年間で、少女が完全に女性に変わっている。

「あっ、そこにいると邪魔みたい。外に出ましようよ」
睦子は、先に立って、自動ドアから外に出た。タイト・スカートに包まれたヒップは形が良かった。

——山岡は大学二年のとき、二か月だけ家庭教師のアルバイトをした。その世話をしてくれたのは、父の友人に当る宮田であった。宮田は、山岡が大学にはいるとき、保証人にもなってくれたのだが、ある夜、山岡のアパートに電話をよこし、家庭教師をする気はないかと言った。

『もちろんあります。でも、理科系は不得手だから……』

『そんな心配はない。相手は小学校六年の女の子だ』
『小学生ですか？　じゃあ、どこか私立の名門校を狙っているのですね』

それだったら、敬遠した方がよさそうだと山岡は考えた。そういう家庭では、こどもの成績に、両親が神経過敏になっている。うまく成績を上げさせればいいが、うまく行かないと、家庭教師の責任にされかねない。

『いやいや、そういうのではないらしい。実は、いま、あるバーで飲んでいるんだけれどね。そのママに、君の話したら、娘の家庭教師にどうだろうと言われてね。週二回ぐらい、遊び相手になりながら、勉強をみてくればいいということなんだ』

その小学生というのが、水谷睦子だった。彼女の母親、克代は銀座で小さなバーを経営していた。

克代は、毎日、四時半には入浴を済ませてマンションを出、美容院を回って店に行くという生活をしている。帰宅は深夜になり、それまでの間、睦子は、ひと

りで留守番していなければならない。口には出さないが、きつと淋しい思いをしているに違いないから、身許のしっかりした学生に、家庭教師になってもらえたら……というのが、克代の希望だった。

『それだったら、むしろ女子学生の方がいいんじゃないでしょうか？』

と、最初に克代に会ったとき、山岡は言った。『ぼくは、女の子の遊びも知らないし、どんな風にすればいいのか、見当もつきません』

『ううん、男の大学生さんに、というのは睦子の希望なんです。お兄ちゃんの方がいいなんて……。実はね、火曜日と金曜日には、家政婦さんが来て八時ごろまでは、睦子と一緒にテレビを見たりもしてくれるの。でも、そんなぐあいでは、あたくしのところ、全く男っ気がないでしょう？　それで、睦子としても、何となく男の人に来てもらいたいという気持ちになったのじゃないかしら？』

克代の話によると、睦子の父親は、まだ睦子が片言

も話せないところに、交通事故で死亡したのだという。

事故の相手が、大会社の社用車だったので、かなりの賠償金が出、それと生命保険の保険金で、克代はパーを出したらしい。それ以後十年近く、睦子には祖母に当たる克代の実母が、一緒に住んで、家事や睦子の面倒をみていたのだが、彼女は、一年半前に、心筋梗塞で急死してしまった。

『そんなわけで、いま、あの子、夜はテレビだけが友達ちという感じで……。そういうのって、こどもの精神上あまりよくないという話でしょう？ だから、せめて週二回でも、大学生の方が話し相手になって下されば……』

と言って、克代は頭を下げた。

当時、克代は、三十三歳だった。山岡に会うというので、ふだんより地味な服装をして来たらしいが、それでも、山岡はまぶしいほどの華やかさを彼女に感じた。

果して、自分に勤まるだろうか、と半ば怪しみなが

らも、彼が引き受ける気になったのは、彼女のその華やかさに圧倒されたせいかもしれない。

それから、睦子の進学について、とくに気を使う必要がないと言われたことも、山岡を楽な気持ちにさせた。睦子は、P女子大の付属小学校に通っており、特別な受験準備をしなくても、進学できることになっていた……。

「お母さんは、いまでも銀座で？」

病院の近くのレストランにはいり、スパゲッティを注文したあと、山岡は聞いた。時刻の割には、そこは空いていたが、それは値段が高いためかもしれない。

一番安いのがスパゲッティだった。

「いいえ、あのお店は、結婚してやめました。いまは、青山でアクセサリーの店をやっています」

「そう、結婚なさったの？ お店のお客さんと？ あ、こんなこと聞いちゃあ失礼だね」

「失礼ということもないけれど……。高校の音楽教師で、あのマンションの近くに住んでいた人」

睦子は、ハンドバッグから煙草を出し、火をつけた。そして、その外国煙草を、テーブルの上で滑らすように押しながら、

「山岡さん、煙草は？」

と聞く。

「……………」

山岡は、黙って首を振った。

「じゃあ、煙草を喫う女って嫌い？」

「そんなことはないさ。それより、お母さんと結婚した人、高梨というんじゃないだろうね？」

山岡は、『高梨』という姓が、すぐに記憶の底から浮かび上がったことに、自分でも驚いた。彼自身は、きょう睦子に会うまでは、あのときのことは、すっかり忘れてしまっていたつもりだった。

「どうして？」

睦子は、目を見開くようにして聞いた。その丸い目

に、覚えがあった。あのころも、トランプ手品を見せると、よくこんな目をしたものだ。「どうして知っているんですか？」

「じゃあ、そうなの？ 奇妙な縁だな」

と山岡はつぶやいた。

「奇妙な縁で、どういうこと？」

「うん……。まあいいじゃないか、昔のことなんだし……。それで、お母さんは、高梨さんとうまく行っているんだろう？」

「まあね……。ただど気になるなあ……。なぜ、山岡さんが、高梨さんのことを知っていたのか……」

ウェイトレスが、スバゲッティを運んで来たので会話は中断した。山岡はミート・ソースで、睦子はナポリタンだった。

睦子は、小声で、

「いただきます」

と言って、フォークを取り上げた。そして最初の一口のあと、すぐに、

「おいしい」

と、山岡に微笑みかけた。

あ、これも変っていない、と山岡は思った。あのころ、おみやげに買って行ったアイスクリームに対して、睦子は、いまと同じように、素朴に喜びを表現した……。

しかし、睦子は、あの当時のことを、どれだけ記憶しているのだろうか？ 果して、あの小事件も覚えているだろうか？

小学校六年と言えば、もう、はっきりと物心はついているはずである。しかも、あのことは、彼女にとっても、特異な体験だったと思われる。従って、全く忘れていたとは考えられないが……。

それとも、ことがことだけに、大きな心理的な抑圧が働き、記憶の層の奥底にしまい込まれているのか。

山岡は、フォークを器用に使っている睦子を眺めながら、そのことを考え続けていた。

やはり、睦子は忘れてはいなかったようだ。

スパゲッティを半分ほど食べ終ったとき、彼女はフォークを使う手を休めて、山岡に問いかけて来た。

「あのう……。ちょっとお聞きしたいことがあるんです。あたし、前から、もし山岡さんに会えたら聞いてみたいと思って……。だから、さっき、病院で、あれは山岡さんじゃないかと思ったとき、胸がどきどきしてしまつて……」

睦子は、真正面から、山岡を見据えるようにして言った。その言葉の通りなら、彼女は、その質問をどのような形で切り出すべきか、このレストランにはいつてからずっと、考え続けていたことになる。

「ふうん、どんなこと？」

「山岡さん、家庭教師のお仕事を、急にやめてしまつたでしょう？ あれ、どうしてなんです？ あたしに関係があるんですか？」

「ああ、あれね」

山岡は、ナプキンで口を拭い、グラスの水を飲んだ。「お母さんからは、何も聞いていないの？」

「一応は説明してくれました。＃先生は、学校のお勉強が大変なので、陸ちゃんのおうちへ来る暇がなくなつた」って……。でも、それを聞いたとき、あたし、こども心にもおかしいなと思つたんです」

「おかしい？　つまり、お母さんが嘘を言っているのではないか、と考えたわけ？」

「いいえ、母が嘘をついたというのではなく、山岡さんが母に本当の理由をおっしゃらなかったのではないか……。あたし、そんな風に考えたんです」

「なるほど、お母さんを信用していたんだね？」

山岡は、おだやかな気分になつた。あのころの睦子は、一番好きなのはお母さんだ、といつも言っていた。だから、彼女はその好きなお母さんが、自分に嘘を言うはずはないと考えたのだろう。

「ええ……。それで、あたし、山岡さんが家庭教師をやめたのは、あたしが嫌いになつたからだろうと……。

でも、そんなことを、母に言うわけには行かないので、勉強の都合でやめさせてくれと言つたのではないか、なんて気を回したんです」

「嫌いになつたとは、また変な風に考えたもんだなあ……。ぼくは、陸ちゃんが、そんなことを思っているとは、想像もしていなかったよ」

「じゃあ違うんですか？」

と、睦子は聞いた。切り込むような口調ではなく、むしろ、その反対だった。一種の安堵感が、彼女の表情からも読みとれた。

「それは違うさ。ぼくは、あの家庭教師をやめたくはなかつたんだもの。しかし……」

「すると、何と言つたらいいのかなあ……。罪悪感みたいなものがあつて、やめようと思つたのかしら？」

「罪悪感？　どうして？」

と、山岡は問い返した。睦子をからかってやろう、という気持も、彼の中にはあるようだった。

「だって……」

睦子は、微妙な表情をした。

「罪悪感というのは、何か悪いことをした場合に生まれるものだろうか？　あのころ、ぼくが何か悪いことをした？」

「……………」

睦子は、黙って山岡の顔を見つめていた。ことによると、彼女は当惑しているのかもしれない。

彼女は、たしかに、あのことを記憶しているらしい。それは間違いない。しかし、一方で、その記憶がぐらつき始めているのではあるまいか。何しろ、彼女にとっては、小学校時代のことである。彼女が、あれはことによると、現実ではなく夢の中のできごとだったのか、と疑い出したとしても不思議ではない。

「睦ちゃんが言いたいのは、あの年の七月十四日のことなんだろう？」

山岡は、睦子が、スパゲッティを四分の一くらい残

して、フォークを置いたのを見て切り出した。彼の方は、その前に、すでに食べ終っていた。

「さあ、日付までは覚えていないけれど、夏だったとは……………」

「間違いなく、七月十四日だった。月曜日で天候は晴れ。かなり暑かったね。日中は、三十度近くなったんじゃないかな」

「……………」

睦子は、呆れたように、山岡の顔を眺めている。

ウェイトレスが来て、もう下げていいかと尋ね、皿を運んで行った。このあと、デミ・カップのコーヒールが来るはずであった。

「どう？　あのときのことを話してみようか？　もつとも、君も覚えていらっしゃるから、わざわざ繰返さなくても……………」

「ええ、覚えています」

睦子は、照れたように笑った。

「そう……。じゃあ……………」

と言ったが、あとが続かなかった。睦子の記憶と、彼自身の記憶と、ことによると違うのではないか、という考えがひらめいたからであった。

——たしか、夕方の六時ごろだったろう。夏のこと、あたりはまだ明るかった。

睦子たち親子は、当時南青山のマンションの五階に住んでいたが、睦子の勉強机は、ベランダに面した明るいところに置かれてあった。ベランダと勉強部屋とを仕切っているのは、大きなガラス戸で、そのガラスには、薄く色がついていた。

その日の睦子は、最初から、どこかいつもと違っていた。

『きょうは、先生がここに坐って……』

と、自分の椅子を山岡に譲り、彼がそれに腰かけると同時に、彼の膝に上がって来た。

『どうするんだい？ これじゃあ、勉強できないじゃないか』

『きょうはお勉強いいの。宿題はみんなやっちゃった

もん』

睦子は、山岡の膝に横向きに腰かけ、じっと彼の目に見入った。左手を彼の首にかけている。

そのときになって、山岡は気がついた。睦子は香水をつけているらしい。

『あ、ママの香水だろう？』

『うん、汗くさいと先生に悪いから……』

『ばかだなあ、こどもはそんなこと気にしなくてもいいんだ』

『もう、こどもじゃないもの』

『こどもだよ。小学生のうちは、電車だって半額で……』

『だって、お母さんが言ったわよ。アンネがあったら、もう大人だって……』

『……………』

山岡は絶句した。半分は驚きのためだったが、当惑の方が大きかった。彼自身のからだの一部が、睦子の尻が乗っているあたりで、生理的な変化を起こしてい